# 都留のなかの大学

都留文科大学助教授　福田　誠治

今から六百年も七百年も前のヨーロッパの話で、大学がはじめてできた頃のことです。まず大学という建物はありませんでした。何かエライ物知りがいるという噂を聞きつけて、学生がやってきます。身の回りの持ち物を入れたカゴを背中にしょって、はるばるアルプスを越えて集まって来ました。そして、先生から文字通り有り難い話を聞くわけです。それだけです。そのうち、小屋を借りて講義室にする先生が出てきます。学生たちも、出身地別に下宿に集まり住むようになります。こうして教師と学生が定住して、大学町ができました。若者が集まると、当然に酒場もできるわけで、美しい女性も活躍します。こうして事件の種もそろいまして、学生が市民との間にイザコザを引き起こしては寮に逃げ込み、そこに立てこもるのもしばしばということになります。税金も払わず、土地の仕事もしないわけですから、領主や国王と対立することになってしまうわけでして、こういう場合には利害の一致した先生と学生は団結して難局に当たりました。そんなわけで、めでたく大学が成立します。いわば、浮世とは離れたところに大学が出来上がったのです。教師と学生の連合体が大学でして、ユニバーシティ（大学）とユニオン（組合）とは同じ意味であります。そして、ついには、国王から「好きにしてよい」という特許状を受け取って、大学の自治が認められ、正式に大学が発足します。

ついでに、こんな話もあります。ある年のこと、町の下宿屋が下宿代の値上げをしようとしましたところ、学生と教師が大挙して隣町へ逃げ出すと言い出したのです。あわてた大家たちは、下宿代を据え置いたそうです。それもこれも、

遠い昔の話です。

都留の町は、不思議な町です。ヨーロッパ中世の大学町のように、学生たちが狭い土地に住み着いています。私が赴任した十一年前とはちがって、学生と下宿の大家さんとの結びつきはずいぶん少なくなってきました。それでも、アルバイトや家庭教師という形で、学生と市民とは結びついているようです。なかには女子学生が地元の青年と結婚して都留に骨を埋めるという例もときどき出てきておりまして、大学は地元に思わぬ効果ももたらすようです。あるいは、学生同士で結婚し、そして地域の人々の暖かい援助を受けながら出産し、都留に住み着くカップルもあるという話です。大学が地域に活力を与えている、ということでしょうか。

私にとっても、この大学はおもしろい職場です。ちょうど前回の広報に後藤先生が書いておられましたように、都会の大学では授業が終わればそれきりです。ところが、下宿が大学の回りにあるものですから、夕方から夜まで授業ができます。その他、酒を酌み交すことも数多くありまして、じっくり話をすることができます。大学の授業で学生に伝えられることは、どうしても上滑りになりがちです。学生も授業への出席の方を気にしていて、授業の中身にはなかなか入り込んではくれません。まるでテレビを見るような感覚で、学生は大学の授業を聞いているようです。つまり、ボッーと、無表情で、ときどき顔をあげてはこちらを見るわけです。自分に関係ないと思ったら、無視するわけです。長期の学校生活で疲れてしまったからでしょうか、「わからないことを一生懸命わかろうと努力する」という、「学生らしい」けなげな姿はあまり見られなくなりました。そんなことより、単位さえとれば、車とかおしゃれとか海外旅行とか、学生は自分の生活を優先して行動します。

ですから、授業に引き続いた長時間・小人数のゼミと、さらにその番外編が貴重になってきます。そんなところで、学生と何度もぶつかりながら、少しずつ考えを変えていく他はありません。ゼミの最中に、学生同士が涙を流して大喧嘩ということも、何度もありました。私も、寝つかれない夜が幾度となくありました。人間的な付き合い、これが遠い昔の大学の始まりだったのでしょうが、そんなことができるのも都留の町に大学があることによります。都会と比較して安い下宿代と生活費、このような場が提供されていることに深く感謝しています。都留文科大学が田舎の大学という意味ではなく、地域にあるユニークな大学となりうるという意味で、もっと誇り、宣伝してよいのではないでしょうか。

---

## 二十回目の子どもまつりが開催されました

去る五月二十一日（日）都留文科大学と楽山を会場に、第二十回「つる子どもまつり」が行われました。当日は晴天にも恵まれ、都留市内外から二千人近くの子どもたちやお父さん、お母さんが集まりました。

今年は二十回特別企画として、当日来てくれた子どもたちの手型や十年後の自分や友だちにあてたメッセージカードなどを入れたタイムカプセルを埋めました。このタイムカプセルは第三十回「つる子どもまつり」で開ける予定です。

「つる子どもまつり」は子どもの健やかな成長を願い、市内の様様な人たちが集まってつくっています。今年二十回を迎えた「つる子どもまつり」がさらに広がっていきますようご理解、ご参加をよろしくお願いいたします。

つる子どもまつり実行委員会
連絡先　高木もえ子
☎（45）1329